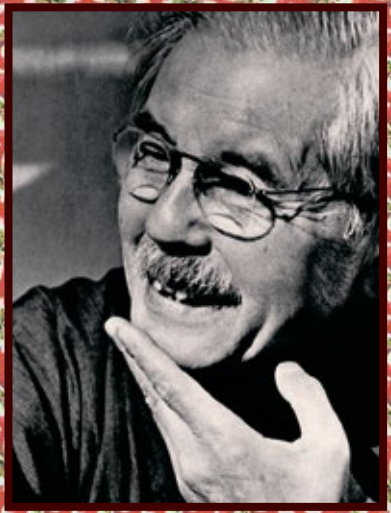
安堵町制30周年記念

安堵偉人列伝



安堵町制30周年記念
安堵偉人列伝

日本の始まりの地・奈良に情報とモノを運んだのは大和川である。この情報とモノは、大和川の北に広がる安堵の地に暮らす人々を刺激し、江戸末期から明治、大正、昭和にかけて多くの偉人を輩出した。近代陶芸の巨匠・富本憲吉、その生涯の友であった今村荒男は結核予防のBCG接種を確立し医学界に大きな功績を遺した。荒男の父・勤三は奈良県再設置の立役者であり、政治家・実業家として活躍。子孫も実業界で功績を残している。平成28年、30周年を迎えた安堵町は町が輩出した偉人の功績を称え、地方創生の柱に据えようとしている。

（奈良日日新聞取締役企画部長兼編集委員　藤田茂）

top Interview　安堵町長

西本安博（にしもと・やすひろ）
昭和22年12月10日生まれ。安堵町窪田出身。立命館大学法学部卒業。奈良市観光経済部長などを経て、平成22年8月に安堵町長就任。平成26年8月に再選（2期目）。

安堵町域一帯は奈良盆地の中でも最も低いところに位置し、奈良盆地を流れる河川のほとんどがこの付近で合流しています。

飛鳥時代には、聖徳太子が飛鳥と斑鳩宮を行き来したとされる太子道が通っていたとされています。また、水路では、飛鳥と難波を結ぶ水上交通の要衝でありました。

この水上交通は、のちに大きな流通へと発展し、明治の中頃まで町内の御幸ヶ瀬浜や隣接する板屋ヶ瀬浜は大変賑わっていました。

人の移動が水運から鉄道に変化する中、大正4年に安堵町内を横断する天理軽便鉄道が開業しました。翌年に現在の安堵駅付近に安堵駅が設置され、周辺には料理店や商店が並びにぎわっていました。交通が充実していた安堵町は、人々の交流が盛んで、文化も発展し著名な文化人や政治家を輩出しています。

幕末に活躍した医師で、自宅に晩翠堂という私塾を開かれた今村文吾がいます。塾の門下生には尊王攘夷の志士・三枝蓊がいましたし、有名な国学者の伴林光平が和歌を教えていました。尊王攘夷の運動は、この安堵の地から始まったと言っても過言ではありません。

また、文吾の甥にあたる今村勤三は、奈良県を独立再設置に導いた中心人物で、初代県議会議長、衆議院議員で後に実業界で活躍しました。

その勤三の四男である今村荒男は、大阪大学第5代総長で文化功労者、結核予防のBCG接種確立に寄与しました。

【安堵町】面積4.31平方キロ（東京ドーム約100個分に相当）。人口7,543人（2016年2月）。大和盆地中央部に位置し、田園地帯が広がる。町西側には富雄川、南側には大和川が流れる。

偉人の志を町づくりに

一方、芸術の分野では近代陶芸の巨匠・富本憲吉を輩出しています。最初のいわゆる人間国宝に認定され、文化勲章も受章されました。このように安堵町から多くの偉人が出たことは町にとっての誇りでもあります。こうした先輩方の志を大切に、今後の町づくりにも生かしていきたいと考えています。

今村勤三

今村家は江戸時代から東安堵村で代々庄屋役などを務めた家で、幕末の天誅組に加盟した国学者で歌人の伴林光平と親交のあった医師・今村文吾は勤三の叔父にあたります。

勤三は〝奈良県の父〟とも呼ばれています。奈良県は明治9年に、県そのものが廃止され堺県に編入されたという過去があります。その後、大阪府に編入されるのですが、大阪府からの独立運動の中心的な役割を果たしています。政界を引退した後も、奈良鉄道株式会社を設立したほか、奈良農工銀行頭取、郡山紡績株式会社の社長を務めるなど、多方面で活躍されました。

また、明治21年に、奈良県で最初の日刊紙「養徳新聞」を創刊するなど、県新聞業界の父とも言われています。

今村荒男

勤三の四男である荒男は、東京帝国大学医学部を卒業され、大阪帝国大学医学部へ転籍しています。専門分野として結核の臨床と研究を積み重ね、日本で初めてBCGの人体接種を行い、結核発病予防効果を科学的に証明されたことで、結核予防にBCG接種が採用される根拠となりました。その後は、早期発見のため、X線間接撮影装置を載せたバスを立案されて、今日の結核予防対策の礎となりました。これらの功績が認められて日本結核病学会は「今村賞」を設立しています。

また、大阪大学の総長として、大阪大学を理系大学から文化系を加えて総合大学としたのも荒男の功績です。奈良県立医学専門学校（奈良県立医科大学）の初代校長も務めるなど、日本の医学の発展に尽力されました。

富本憲吉

近代陶芸の巨匠である富本憲吉は、生まれ育ったふるさとの安堵町を「うぶすな」と呼び、安堵の風景や自然を作品のモチーフとしました。

バーナード・リーチと出会い、親交を深める中で陶芸に興味を持ち、白磁、染付、色絵と作域を広げられました。創作活動を本格化するなかで、安堵から東京、飛騨高山、そして安堵に戻った後、京都に活動の拠点を移されていますが、節目ごとに必ず、安堵に戻っています。心はいつも安堵にあったようです。精緻で美しい模様は安堵の自然から生まれたものです。清純にして華麗、色鮮やかな富本作品は多くの人々を魅了し続けており、富本四弁花模様を安堵町のシンボルにしています。

いまむら　きんぞう

安堵偉人列伝①―今村勤三

1851年3月1日 - 1924年10月26日

奈良県独立の立役者

大和国全域を管轄する奈良県が最初に誕生したのは明治4年11月22日のこと。しかし、同9年4月18日、河内国・和泉国を管轄する堺県に編入された。そして同14年2月7日、堺県は大阪府に吸収され、大和国は大阪府の一地域となる。

大阪府の一部だった大和国が再び奈良県として独立（再設置）したのは同20年11月4日。大阪府に吸収されてから6年後のことである。独立運動の中心人物が、安堵町が生んだ傑出した政治家であり実業家の今村勤三である。

勤三は奈良鉄道（現JR奈良線）の社長、郡山紡績（現ユニチカへ合併）の社長を務めるなど、マルチな才能を発揮した。また、県で初めての日刊紙「養徳新聞」（やまとしんぶん、後に大和新聞に改題）を発刊している。その大和新聞にいた赤堀自助が「奈良新聞」（初代）を創刊し、勤三も支援した。今村勤三は奈良県新聞業界の父とも呼べる存在なのだ。

勤三は若くしてその才能を見込まれ、奈良県が堺県に編入された明治9年に推されて堺県の県会議員になる。大阪府に吸収されると、引き続いて府会議員になった。

勤三は大和を分離独立しなければ郷土の発展は望めないと考えるようになった。それは他の大和出身の議員も同様で、大阪府に吸収されたことで大和の民の心が分離独立という方向に向いたといえる。勤三らは大和国内の有志を募り、内務省に提出する請願書をまとめあげた。

東京への旅費や滞在費など、相当な金額にのぼったようだが、勤三らは自費で用意した。

維新の志士に伍す情熱

強い決意を持って上京した勤三らであったが、明治政府は陸海軍の拡張を優先し、奈良県の再設置の請願を突っぱねた。勤三らは作戦を練り直し、請願を内務省から国家権力を総括する太政官へと切り替え再び上京する。しかし、薩摩と長州出身の政府の大物には面会することができずに、この活動も失敗に終わる。

一方、大和ではこの作戦を授けた北畠治房と勤三との関係を中傷する動き、さらには再設置後の県庁所在地をめぐる対立なども重なり、再設置運動が頓挫してしまうのである。

運動の熱が再び盛り上がるきっかけとなったのは明治18年の大洪水である。5月の末から7月にかけて降り続いた長雨、そして台風襲来が重なり近畿地方は大洪水に見舞われた。特に大阪は浪華三大橋（天満橋、天神橋、難波橋）をはじめ30を超える橋が流され壊滅的な被害が出た。

大和でも佐保川、曽我川が決壊し床上浸水が相次ぎ、数十カ所で土砂崩れが発生し、明治元年以来の大災害となった。この時の大阪府内の被害は住宅全壊・半壊1万7122棟、床上・床下浸水約7万1000棟に上る。

膨大な復旧費の大半は摂津、河内、和泉に充てられ、大和は放置された。普段から府の行政に不信感を持っていた大和の人々の怒りが爆発した。

勤三らは下火になっていた奈良県再設置運動を再開するチャンスととらえた。しかし、大和の民の怒りとは裏腹に、再設置運動は盛り上がりを欠き、政府を動かす力はなかった。繰り返し行った奈良県再設置運動は実ることなく同20年を迎えた。運動を進めた勤三らの挫折感と焦燥感は想像して余りある。

不撓不屈の運動が実る

政府は明治18年の暮れに薩長中心の内閣を創設し、同23年からの国会開設に備えて、態勢固めを急いでいた。このようななかで全国的に土地測量を行い、地価を修正した。

大阪府においては摂津、河内、和泉は100円につき5円の割合で下げるが、大和は現状維持とするものだった。地価が下がれば地租は少なくなる。大和にとっては見過ごすことのできない深刻な事態である。2年前の大洪水のこともあり、もはや大和の民の怒りは頂点に達していた。

勤三らは背水の思いで再び立ち上がり、同20年9月末に、分置県と地価修正の願いをもって上京した。一同は山県有朋内務大臣に奈良県再設置の件を請願する一方、松方正義大蔵大臣に対しては地価修正を嘆願した。地価の修正には応じないとする松方に、大和の有志は激しい言葉で食い下がったという。

松方は激怒し、側にあったたばこ入れを投げつけたとも言われている。大和の有志はそこでもひるまず「地価修正・地租軽減のことが認められなければ生きて大和には帰れない」と訴えたという。

松方は態度を改め「いまさら地価修正・地租軽減を大和にも適用することはできないので、なにかみやげを用意しよう」と言った。もちろんみやげとは、大和が積年に渡り願った分置県である。

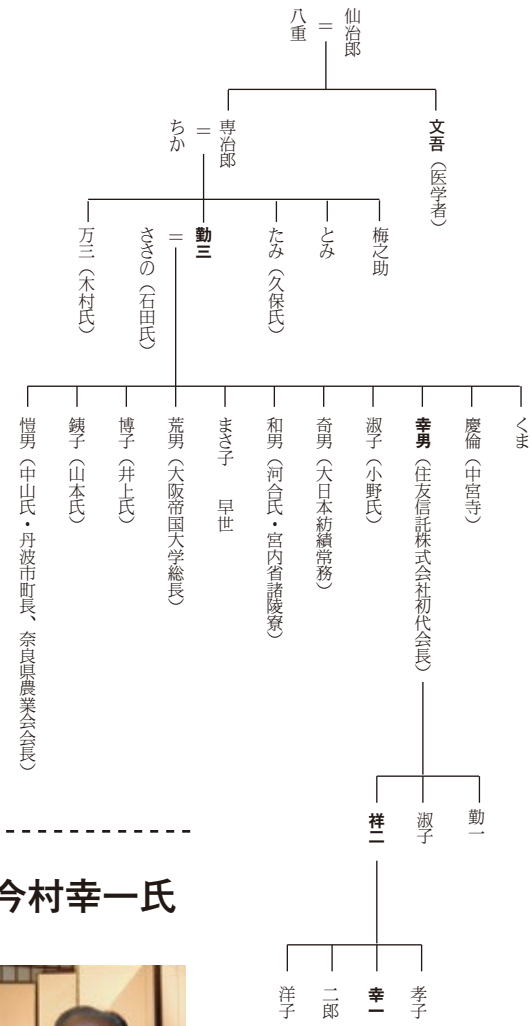
同年11月4日、奈良県設置に関する勅令が出された。再設置運動を始めて以来苦節6年、新生奈良県が誕生した。勤三ら、この運動に心血を注いできた大和の有志たちが大輪を咲かせたのである。

県庁は奈良町の興福寺境内の旧寧楽書院に置かれた。初代知事には元堺県令で元老院議官の税所篤が任命され、12月には県会議員選挙も行われた。

勤三は平群郡から立候補し当選すると、翌年の第1回県議会で、再設置運動の功績が認められ初代の県議会議長に選出されたのである。この時、37歳である。

今村勤三

□今村勤三の系譜



子孫も各界で活躍

長男の幸男は住友銀行で活躍に大きな足跡を残し、後に大日本紡績の常務を務めた。四男の荒男は大医学者として後世に名を残している。後に住友信託株式会社の初代会長に。次男の奇男は「栄光式索引装置」を考案、紡績業界

現今村家当主―今村幸一氏

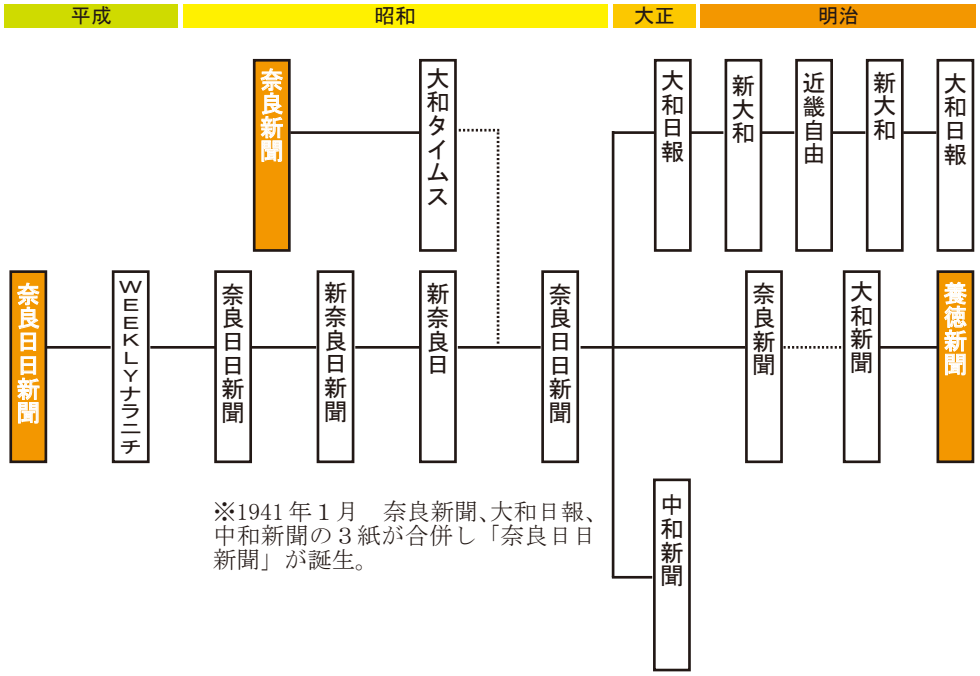
勤三はやっぱり真面目だったと思います。浮いた話を聞いたことがない。勤三は当時としては大変なおしゃれ好きだったと聞いています。荒男・大叔父や祖父の幸男もハイカラだった。血筋的に進取の気性があったのでしょうね。また、祖先をとても大切にされていた。

奈良県再設置という偉業を成し遂げるにあたって、どういういきさつがあったか詳しくは知りません。県議会議員になり、奈良県庁の近くにも家を持っていたようです。

安堵町は昔から水争いがあり、村の長が治めていたようです。いまは水利組合に権

奈良県再設置の立役者・今村勤三が創刊した「養徳（やまと）新聞」は県で初めての日刊紙。幾多の変遷を経て、現在の「奈良新聞」「奈良日日新聞」に引き継がれている。

県新聞業界の発展にも寄与



※1941年１月　奈良新聞、大和日報、中和新聞の３紙が合併し「奈良日日新聞」が誕生。

「好きなことをやる」気質が今村家にある

利が移っていると思うのですが、勤三名義のため池があったと聞いていますから、勤三も争いごとをまとめていたのではないでしょうか。いま本家は安堵町に寄付しましたが今後、墓をどう守っていくのかを心配しています。安堵の墓は勤三、幸男、勤一と長男が入っていますが、伯父にあたる勤一の代で男系は途絶えています。私の父・祥二の墓は東京にあります。

今村家は医者の家系で、荒男・大叔父のところはずっと医者が続いていましたから、私の父も一人は医者にしたいとずっと言っていましたが、かないませんでした。

私は住友商事に勤め、海外勤務が多かった。最後は自動車の輸出を担当し、その後、CATV会社の社長になりました。祖父は住友信託株式会社で、長男の勤一は住友海上でした。

勤三もそうだと思うのですが、今村家には「好きにやれ」という雰囲気があります。祖父も住友銀行時代にニューヨーク支店長を勤めたこともありますから、そういう意味では案外、自由気ままなところはあったようです。だから奈良県再設置運動も「好きなことをやる」という気質が影響したのかもしれませんね。

いまむら　あらお

安堵偉人列伝②―今村荒男

1887年10月13日－1967年6月13日

今村家は、勤三の伯父・文吾の代から医者になったとされている。今村家の現当主・幸一氏によると、子や孫のうち誰か一人でも医者になってほしかったと述懐した。勤三直系の子孫から医者は消えることとなったが、勤三の四男・荒男は、医学界の歴史に大きな足跡を残すとともに、子孫も医者として活躍している。

荒男は結核予防のBCG接種を確立したことで有名だ。大阪大学第三内科100周年記念誌によると、荒男は大正元年、東京帝国大学医学部を卒業し、青山内科、伝染病研究所（伝研）を経て、大正14年に大阪医科大学（現在の大阪大学医学部）へ移った。実は伝研時代に、結核を患い5年間の闘病生活を経て復活すると、結核の研究に限りない情熱を傾けた。

天賦の才で医学を牽引

大阪大学第5代総長

大阪大学の結核専門診療科として設立された肺癆（はいろう）科から発展した第三内科の初代教授となる。当時、結核の治療法は確立されておらず「結核にかからない」ことが最大の関心で、荒男は昭和2年の日本結核病学会総会で「結核ワクチンの予防的効力批判」と題して報告した。このなかで結核予防は結核免疫を利用すべきと結論し、BCG接種が最も有望と主張した。

それを実証するためフランスのパスツール研究所に留学して勉強し、帰国後、BCG接種の研究を続けた。昭和5年、ツベルクリン反応（結核感染の診断方法）の陰性者に対してBCG皮下接種を行った。これが日本で初めてのBCG人体接種となった。

ドイツではBCGを間違えて飲ませて70人余の乳幼児が死亡するというニュースが日本でも報道され、大騒ぎになっているなかでの実験であった。荒男は自身の研究結果から揺るぎない信念の元で敢行したのである。

BCG予防接種を確立

その後もBCG接種実験を行い経過観察から、BCG接種によって結核の発病は2分の1から3分の1に減り、死亡は10分の1までに激減した。この成果はWHOにも認められ、結核予防法にBCG接種が採用されることになった。

今では一般的になったレントゲンの検診車の設計と、試作をしたのも荒男である。公益社団法人結核予防協会のホームページには、「結核予防会大阪府支部の今村荒男がわが国初の健診車両を設計し、瞬く間にX線間接撮影装置を載せた健診車が全国に普及していった」と記されている。

その後、大阪大学の第5代総長を務め、法文学部（旧制）の新設に尽力し、医学・理学・工学の3学部で発足した同大学の総合大学としての礎を築いている。また、奈良県立医学専門学校（現奈良県立医科大学）の初代校長も務めている。

今村荒男の肖像画（小磯良平・画）
大阪大学第三内科提供

長兄の幸男を始め兄弟は安堵を離れてはいたが、荒男はずっと安堵の生家で暮らし、妻と共に診療所で、住民らの診察にあたった。

昭和35年には医学界への多大の功績により文化功労者として顕彰された。昭和42年、81歳で生涯を閉じた。その功績を称え、日本結核病学会に「今村賞」が設けられた。

富本憲吉と終生の友情

近代陶芸の巨匠で人間国宝の富本憲吉とは郡山中学の同級生とあって終生親交を温めていた。富本が病を患い、治療を荒男が務めたという話はあまり知られていない。

その友情の証として2人が残した「日新」の書は、安堵町長室に飾られている。

また、テレビ放送で話題を呼んだ富本の「色絵磁器」は、作品の出来栄えもさることながら、元々荒男が所持していたことが判明している。化粧箱には「富本氏は陶界の巨匠にして現に帝展審査員なり阪大内科今村教授とは同郷同窓なり　今村教授は長與又郎総長の愛弟子なれば　奈良医専に講ずるを機に　校長たる同教授に亡父の遺品なる長與専斎翁の書を謹呈せるに大いに喜びて本品を贈らる」と書いてあり、ここにも友情の証が残っている。

安堵町長室に飾られる「日新の書」（左）は、憲吉が描き、荒男が揮毫した。２人の友情を物語る化粧箱（右）

安堵町 名所・史跡

安堵町のおみやげ①

ミニ行灯「しあわせの灯」

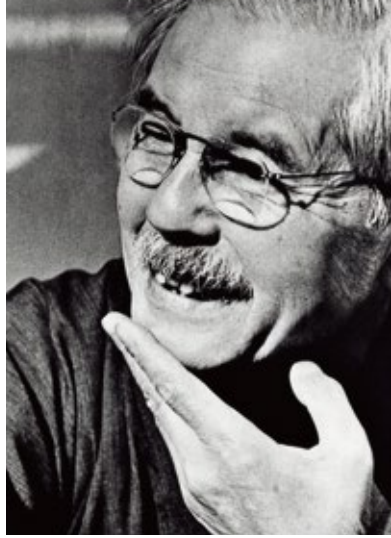
安堵町のおみやげ②

[赤米][緑米][実り]

安堵偉人列伝③―富本憲吉

とみもと　けんきち

1886年6月5日～1963年6月8日



近代陶芸の巨匠

最初の人間国宝に認定

近代陶芸の巨匠・富本憲吉を美術の世界へと足を踏み入れるきっかけをつくったのは、郡山中学の恩師である水木十五堂先生ではないか。水木先生は本名を要太郎といい、愛媛県の松山中学から東京高等師範学校を明治20年に卒業し、28年から郡山中学校で教鞭を執り、後に奈良女子高等師範学校の教授を務めている。

地歴や国漢を教えていたが、音楽や芸能、美術など万般にわたる博識と卓見、さらにユーモアも持ち合わせていた。奈良では大変有名な大学者であり、自宅には訪問者が絶えなかったという。

憲吉は郡山中学を卒業した後、水木先生に数多くの絵ハガキを送っている。週に2通から3通はあったとされているから、水木先生をかなり慕っていたことがうかがえる。憲吉と水木先生の間には、恩と義で結ばれた師弟関係のようなものがあったのではないか。

憲吉が郡山中学で最終学年を迎えた春、東大寺大仏殿回廊で奈良絵画展が開催された。主催したのは横山大観や下村観山の率いる日本美術院だが、憲吉は法隆寺金堂の壁画を模写した作品で一般部門の入選を果たした。

憲吉は図画で良い評点はなかったから、応募を奨めたのは水木先生ではなかったのかと言われている。いずれにしてもこの入選が、美術学校への進学を考えるきっかけになった。ただし、美術や工芸を一生の仕事と決めたというものではなく、「石でも彫ってみたい」と軽い気持ちだったようだ。

小学生の頃、時計の分解に興味を抱けば「時計屋」。中学生の頃は、大阪・北浜で株屋をやっている伯父に憧れて「株屋」を、そして美術学校へ進学する頃には「石屋」と、憲吉の職業選びは、その時に出会ったもの、熱中したものに感化されている。

イギリス留学中は、ロンドンのパイロット養成所を見て本気で「飛行機乗り」を考えたようだし、建築家・新家孝正と出会い、写真助手としてインドを巡るうちに「カメラマン」や「トラック運転手」にも興味を持ったようだ。

イギリス人陶芸家のバーナード・リーチとの交友が、憲吉を陶芸の世界に誘うことになる。リーチは白樺派の柳宗悦や高村光太郎らと親しく付き合い、陶芸品を世界に広めた人物である。

憲吉は美術学校で室内装飾を学び、卒業後は美術界でも知られる存在になっていた。

憲吉（左）とバーナード・リーチ

富本憲吉の代表作品
「赤地金銀彩羊歯模様蓋付飾壺」

この頃、リーチと一緒に展覧会場の装飾を任されることになるが、会期前に腸チフスを患い、失意のまま故郷の安堵村に戻っている。

憲吉がリーチに宛てた手紙には「汚い東京人の美術家サークルから逃亡して、田舎に英国農家風のコテイジを建てて、ひとりでデザインや読書をするのが夢だ」とし、「リイチやほんの少数の友人との芸術的生活が救いだった」と礼を述べている。

その後、リーチは安堵村を訪れ、憲吉の案内で法隆寺や奈良の博物館を見学している。日本文化の精髄に感嘆するリーチを前に、憲吉の心は充足されてゆき、創作意欲が高まっていく。

リーチは日本滞在の間に楽焼きを本格的に習いたいという願望があった。憲吉にも良い先生を紹介してほしいと頼んだ。楽焼きは古くから家を失う道楽の極致と云われていることもあり、憲吉は諦めるよう諭したものの、「なおさらやりたい」とリーチは目を輝かせたという。

リーチの陶芸熱が影響

憲吉はリーチに付き添い、楽焼きの上手な老人が住んでいるという東京・入谷の下町を訪れた。老人は「自分は偏屈でやかましいので弟子がいない。だが、外国人でそんな心がけの人は珍しい」といって入門を許したのである。その老人は三浦乾也の唯一の弟子で、六代目尾形乾山であることを後で知ったという。

リーチの陶芸熱に影響を受けた憲吉は明治45年、京都で楽焼の道具を買い揃えると、大正2年、リーチと乾山の助言を受けて自宅の裏庭に据え付け式の楽焼窯を築いた。大正3年、尾竹紅吉（一枝）と結婚し、翌大正4年、故郷・安堵村に本格的な窯を築いて創作を開始する。

陶磁器の研究のため信楽、瀬戸など各地の窯場や朝鮮半島にも足を運んだ。李朝に影響された物や民芸調の作品をつくるなかで、白磁の焼成に成功する。

15年、奈良から東京世田谷に移り、白磁、染付の作品を制作する一方、色絵磁器の制作にも励んでいる。昭和10年、帝国芸術院の前身である帝国美術院会員。19年には東京美術学校の教授となる。戦時中は疎開のため生徒とともに一時岐阜県高山に移っている。

終戦後、美術学校、芸術院会員を辞し、家族とも別れを告げ突然、故郷の安堵村に帰っている。憲吉は還暦の60歳。安堵の実家に戻ったものの、荒れ果てた家で暮らすことをためらい、陶器も「ここでは焼けん」と京都の新烏丸へ移っている。

この頃、色絵に加えて金銀を同時に焼き付けるという技法・金銀彩を完成させ、羊歯文様などによる独自の作陶様式を確立した。

28年、京都市立美術大学教授。30年2月15日には重要無形文化財「色絵磁器」保持者として人間国宝に認定、前年の文化財保護法改正によって新設された重要無形文化財の保持者認定制度発足後に最初に認定された人間国宝の一人となった。36年には文化勲章を受章している。満77歳で死去。

安堵偉人列伝④—今村文吾（いまむら ぶんご）

私塾晩翠堂を開く

尊王の志士

幕末の医師・儒学者。東安堵村の医師・今村仙治郎の子。奈良県の独立運動に尽力した今村勤三の伯父。大阪大学第5代総長の今村荒男は勤三の子にあたる。

今村家は代々大和中宮寺の侍医とされている。文吾は幼少から京都の山脇元沖（東海）に医学を学び、厳垣松苗に儒学を学んだ。24歳で、郷里の東安堵村に戻り、天保3年（1835年）に晩翠堂と名付けた私塾を開いた。同塾の門下生には、尊王攘夷の志士・三枝蓊がいるほか、甥の勤三も同塾で学んだとされている。また、維新百傑に数えられる国学者の伴林光平は同塾で和歌を教えていた。

文吾は尊王派として知られる。安政の大獄で弾圧を逃れて大和に入る志士を庇護（ひご）したほか、天誅組の大和挙兵にあたっては軍資を送っている。天誅組の変が失敗に終わり、敗走中の伴林が安堵の文吾を訪ねたが会えなかったという。伴林が捕えられて処刑されると、文吾も後を追うように翌年57歳で没した。

伴林光平は僧侶ではあるが国学や朱子学、和歌を学び、日本中を行脚した。八尾の教恩寺の住職として落ち着き16年過ごすが、尊皇攘夷運動が盛り上がると、志士たちに同調し行動を共にした。1861年、尊皇思想にその身を捧げるべく還俗する意思を固め、寺の壁に決意を込めた七言絶句を残し、八尾を去る。

大和に移り住んだ伴林は東安堵村の医者であった文吾の私塾晩翠堂で和歌を教えるなど親交を深めた。1863年、「天誅組の変」が起こると、五條に駆けつけ、天誅組の記録方を受けもった。

安堵偉人列伝⑤—伴林光平（ともばやし みつひら）

天誅組に参加、大和の山陵調査

義挙が失敗に終わると、敗走の中、危険を顧みず、文吾を訪ねたがスレ違いに終わった。それを知った文吾は吐血し根絶したという。捕えられた伴林は奈良奉行所の獄舎で、義挙の経緯を回想した「南山踏雲録」を残した。翌年2月、京都で斬首処刑された。

伴林は、国学の分野で大和・河内の山陵調査に心血を注ぎ、また、御陵の荒廃を嘆いた「野山のなげき」「大和國陵墓検考」などの著書を多く残した。

国道168号滝川口より少し上流、十津川村大字滝川林道内原線沿いには「世を棄（す）てゝくまばや汲まん白菊の花の中ゆく　瀧川の水」と、伴林が獄中の中で読んだ歌碑（写真）が残されている。

今村家と偉人の相関図

多くの偉人を輩出した安堵町において欠かすことのできない存在として浮かび上がるのが「今村家」である。安堵の近代史に刻まれるほど、多くの人物が活躍した。

奈良盆地の中心地で収穫される大和の伝統作物

偉人を育んだ安堵の食材

偉人のエネルギー源として

野菜などの植物は光合成によって炭水化物を分化し糖をつくることで呼吸活動をしている。光合成のできない夜でも呼吸活動は行うが、気温が低いと炭水化物の損失が少なくなることから、栄養が果実に回るということになる。こうした理由から昼夜の寒暖差の激しい奈良盆地は大和野菜とネーミングされるおいしい作物を育んできた。

奈良盆地の中心である安堵町はおいしい作物に恵まれてきた土地でもあり、安堵町が輩出した多くの偉人たちのエネルギー源になったと想像できる。

あったかもんGPで優秀賞

芋煮鍋

地元産のサトイモ、ゴボウ、ニンジンなどの野菜と、大和牛をふんだんに使ったぜいたくな逸品。毎年、初秋に開催される芋煮会は多くの来場者でにぎわう。また、奈良あったかもんグランプリで審査員奨励賞（第1回）、優秀賞（第3回）を受賞している。

大和牛

奈良県大和牛流通推進協議会が主催する大和牛の品評会で常に上位の成績を収めているのが松本牧場の松本光祐さんだ。同協議会の指定生産者で、おから、ビンズなどを有効利用し、環境にやさしい生産を心掛けている。低コストで、しかも良質の大和牛を生産している。安堵町の芋煮鍋が奈良あったかもんグランプリで好成績を収める原動力にもなっている。

ねぶか

奈良盆地伝統の葉ネギで、戦後は盛んに栽培され、大和野菜の雄として認知されていた。他のネギに比べて柔らかく、甘みがあるのが特徴だ。火を通すと甘みが増し、ネギ特有の臭みも軽減する。鍋物に最適で、ネギ焼き、ぬた和えにしてもおいしい。

安堵食材のPR

ノブレスグループのワールド・ヘリテイジは平成28年2月、同グループのホテルアジール・奈良アネックスで、旅行代理店に向けて安堵町の食材を使ったビストロ、招待ディナーを開催。太ネギのクリームスープ、白菜のステーキ、ひのひかりの「パエリャ」、磯部養鶏場の卵を使った「オムレツ」などのメニューを展開。また、人参、大根、かぶ、ラディッシュ、キャベツ バーニャカウダなどの安堵町野菜もをふんだんに使った。県内で2番目に面積が小さな自治体である安堵町で収穫された貴重な食材というコンセプトが来場者を喜ばせた。

大和伝統野菜の雄・ねぶか

最高ランクの評価を受ける大和牛

あったかもんグランプリ優秀賞の芋煮鍋

県品評会で第1位の磯部養鶏場の卵

旧富本憲吉記念館リニューアルオープン（平成29年1月）

うぶすなの郷 TOMIMOTO

和の歴史と自然美に耽る宿

近代陶芸の巨匠・富本憲吉の生家・旧富本憲吉記念館は、富本憲吉を生んだ安堵町の魅力を発信する施設「うぶすなの郷TOMIMOTO」として平成29年1月にリニューアルオープンする。地方創生や町づくりを支援する公益社団法人ソーシャル・サイエンス・ラボ（奈良市）が監修を手掛ける。

人間国宝第一号として今も多くのファンに慕われる富本は自然から美・デザインを追求してきた。庭にもそのモチーフとなった樹木が残っている。基本コンセプトは「樹を楽しむ　陶器を見るに似たり」と富本が詠んだ歌のとおり、遠景・中景・近景が重なるドラマチックなシークエンスをつくりだしている。構想では宿泊施設にリメイクし、プレミアムな客室2室を用意。

地元の食材でレストランも

地元食材を一流シェフが腕を振るうレストランと、陶芸工房を設ける。また、本館の土間は情報発信のできるアートギャラリーをつくる。さらに富本憲吉のもうひとつのルーツであるイギリスのアーツ・アンド・クラフツの世界観を表現するエリアも設ける。

運営は奈良市内を中心にホテルやレストランなど施設で多くの実績を持つノブレスグループのワールド・ヘリテイジ（川井徳子代表、奈良市）が行う。

趣のある古民家は富本のうぶすな・安堵町の歴史文化の深さを堪能できる施設に生まれ変わる。

先人の歩みを現代に蘇らせる取り組み

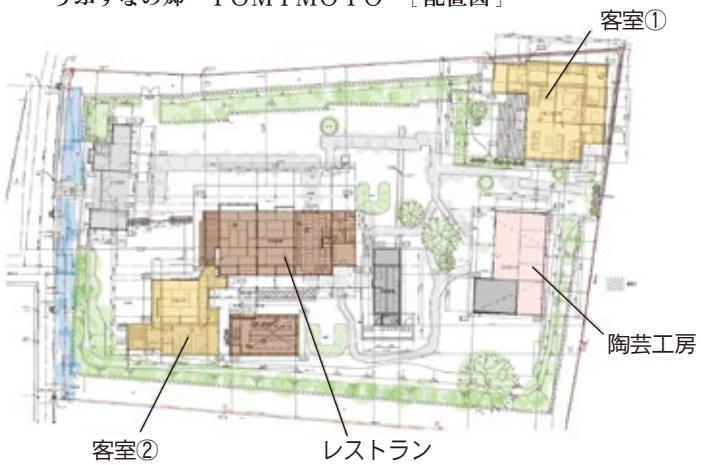
富本憲吉は、陶芸家と評されています。しかし、彼には師に当たる陶芸家はおりません。彼は、イギリスのウイリアム・モリスが提唱するアーツ・アンド・クラフツ運動に憧れ、私費で留学を果たしました。今から１００年ほど前のことです。当時の日英の国力差からすると、きっと大きな挑戦だったことでしょう。費用・学力・語学など様々な問題を抱えながらも、西洋の魅力を自分のものとし、独自の芸術分野を築きあげました。

イギリスの植物をモチーフにした色鮮やかな世界を、日本の植物をモチーフとして、自分なりに咀嚼した表現をしました。 彼の作風は西洋と東洋の出会いの中で育まれた独特のものなのです。特に郷土に咲く「定家カズラ」は、能の演目となっている花でもあります。単なる植物と言うだけでなく、日本の文化と芸術を総合的に秘めたデザインへと昇華させた、画期的な作品です。このような奥深い芸術に、どこまで追随できるかはわかりませんが、富本翁の先見性に見習ってみたいと考えております。

ワールド・ヘリテイジ
川井徳子代表

富本芸術を肌で感じるしつらえ

うぶすなの郷　TOMIMOTO　［配置図］



「うぶすなの郷TOMIMOTO」お問合せ 0742-20-7877（ワールド・ヘリテイジ　担当・平安山（へいあんざん））